

221

明成社

歴総 712

高等学校 地理歴史科 歴史総合 教科書

# 私たちの歴史総合

||||| 内容の解説 |||||



高等学校 地理歴史科用

221 明成社 歴総712

文部科学省検定済教科書

歴史総合

# 私たちの歴史総合

B5判  
202頁

明成社

株式会社明成社

〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-21-29-302

TEL03(3412)2871 FAX03(5431)0759

## 歴史を学ぶということ

著作者代表



伊藤 隆  
(東京大学名誉教授)

歴史を学ぶとはどういうことでしょうか。

これまでの学校で学ぶ歴史は、暗記物がほとんどでした。しかし、それが大きく変わろうとしています。それが今回の「歴史総合」です。

ここで、皆さんは歴史を学ぶ意味を、もう一度考えてみてください。歴史を学ぶとは、「自分自身とは何か」を確認することなのです。私たちの多くは日本人です。それは、両親や周囲の人々から日本語を学び、日本人としての生活習慣を学び、また学校教育を受けることによって、日本人となるのです。その一つが学校での歴史教育です。

私たちの祖先がどのように生活をし、どのような文化を育み、世界の国々とどういう関わりをもってきたのか、そしてそれが今日に至ったのかというのが歴史です。とくに明治維新以降の日本の歴史には目を見張るものがあります。欧米が世界を植民地支配していた時代にも、その植民地になることなく、欧米と互する国家をつくり文化を築きました。

第二次世界大戦で敗北した後も、めざましい復興を遂げ、今日の繁栄を形づくりしました。こうした我々の祖先が、どのように世界で生きてきたのかを知ることが、歴史を学ぶということなのです。

『私たちの歴史総合』には、高校生が学ぶ歴史として、数多くの興味関心があることを掲載しています。この教科書をもとに、歴史総合の学習を進められることを望みます。

## 『私たちの歴史総合』の特色

- (1) 本教科書は、新しい高等学校学習指導要領の地理歴史科・歴史総合に準拠してその目的が達成できるよう編修しています。
- (2) 世界史の流れの中でわが国の近現代史を理解するように構成しています。
- (3) 教科書に歴史事象や歴史用語を無味乾燥に記載しても、先人の歴史が理解できません。本書は、歴史の人物が生き生きとよみがえる、そういう歴史を学ぶことができるように工夫しています。
- (4) 見開き2ページに、1時間の学習内容が詰めこまれています。「第1の問い」から、内容を学び考え、生徒自身が「第2の問い」を考察するようになっています。
- (5) 「歴史View」「コラム」など読み物を多く記載して、歴史の広がりがわかるようになっています。
- (6) 地図、表や史料などの図版を用いて、本文をより理解できるように構成しています。

## 単元構成と配当授業時数

図書の構成	時数
歴史の扉	2
<b>第1編 近代化と私たち</b>	
近代化への問い	2
1章 結びつく世界と日本の開国	
1節 18世紀の日本とアジアの経済と社会	4
2節 工業化の進展と世界市場の形成	4
2章 国民国家と明治維新	
3節 立憲体制と国民国家の形成	5
4節 列強の帝国主義政策とアジア諸国の変容	4
近代化と現代的な諸課題	3
<b>第2編 国際秩序の変化や大衆化と私たち</b>	
国際秩序の変化や大衆化への問い	2
3章 第一次世界大戦と大衆社会の出現	
5節 総力戦と第一次世界大戦後の国際協調体制	4
6節 大衆社会の形成と社会運動の広がり	4
4章 経済危機と第二次世界大戦	
7節 国際協調体制の動揺	3
8節 第二次世界大戦後の国際秩序と日本の国際社会への復帰	5
国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題	3
<b>第3編 グローバル化と私たち</b>	
グローバル化への問い	2
5章 冷戦と世界経済	
9節 国際政治の変容	4
10節 世界経済の拡大と日本の高度経済成長	4
6章 世界秩序の変容と日本	
11節 市場経済の変容と課題	4
12節 冷戦終結後の国際政治の変容と課題	4
現代的な諸課題の形成と展望	3
(予備)	4
	70

## 『私たちの歴史総合』を推薦する先生方の声

- ◆歴史総合は、これまでの高等学校での歴史教育を一変する科目となります。これを教える教師は、この科目をどう教えるのか、迷うことが多いでしょう。この『私たちの歴史総合』は、教師の悩みを解決できるような配慮がされています。この教科書を使うことにより、よりよい歴史総合の授業ができることと思います。(東京都・地歴科教諭)
- ◆歴史を学ぶときに、単に歴史事象や用語を覚えるだけで、生徒自らが興味や関心を起こさなければ、歴史の授業は苦痛でしかなくなります。生徒の興味・関心は、歴史を身近に感じて自分の頭で考えることによってはじめて可能となります。その工夫が、この教科書にはされていると思います。(岐阜県・地歴科教諭)
- ◆『私たちの歴史総合』は、これからの大学受験にも有用になると思います。それは、学習指導要領の意図するところを余すことなく取り入れていることと、大きな歴史の流れに沿って記述が充実していることです。(福岡県・地歴科教諭)

# ページに集中できる構成になっています

1 時限の授業の進度が見開き完結でわかりやすい

目をひくタイトル

第1の問い

1 時限の全体の発問をおこないます

図版資料

豊富な図版資料を用いて、本文を補います

ゴチック表記

重要用語は、わかりやすくゴチック表記にしています

側注

随所に、側注を設け補足説明をします

人物（生没年）

人物には生没年をつけています

## 4 日本の開国

西洋の衝撃をわが国はどう受け止めたのか

鎖国から開国への転換で、わが国は国づくりをどう進めたのだろうか。

外圧による開国

1853（嘉永6）年、アメリカのペリーが蒸気船をふくむ艦隊を率いて、開港を要求した（黒船来航）。江戸幕府は従来の外交政策の転換を決め、翌年日



▲黒船来航 1854年2月10日アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーは軍艦（黒船）7隻を率いて再来し、横浜の海岸に上陸した。

米和親条約<sup>1</sup>を結び、下田と函館を開港した。さらに1858（安政5）年には日米修好通商条約<sup>2</sup>を結び、イギリス・フランス・ロシア・オランダとも同様の条約を締結した（安政の五カ国条約）。

開港すると、イギリスを中心に貿易額が急増した。生糸や蚕種などの原料が輸出され、綿織物などの工業製品が輸入さ

<sup>1</sup> アメリカ船が必要とする燃料や食料の供給、難破船や乗組員の救助、下田・函館の2港を開いて領事の駐在を認めることなどを約束した。

<sup>2</sup> 神奈川・長崎・新潟・兵庫の開港が決まった。居留地内での領事裁判権を認め、関税の税率決定権（関税自主権）を日本に認めない（協定関税制）とする条項をふくんだ。わが国は、この一連の不平等条約改正に大きな努力を払うこととなった。

れた。しかし、小規模な手工業では突然はじまった貿易に対応できず、物価の高騰を招いた。また当初の金銀交換の取り決めにより、大量の金が海外に流失した。

日本の産業革命

幕府や藩は、欧米列強の繁栄の背景には科学技術があると考え、洋式機械工場を設けて紡績・製鉄・造船などの技術摂取に取り組んだ。明治になると、新政府が主導して産業の近代化をさらに進めた（殖産興業）。1870（明

治3）年、伊藤博文<sup>1841~1909</sup>らが提唱して工部省を設置し、近代産業育成へむけた基盤づくりをはじめた。外国から技師を招聘して（お雇い外国人）、1872（明治5）年、群馬県に富岡製糸場を操業したのをは



▲富岡製糸場 製糸業は産業革命の推進力となった。富岡製糸場は1872（明治5）年に操業を開始した群馬県の官営模範工場。

じめ、各地に官営模範工場をつくり軽工業分野の機械化をはかった。大久保利通<sup>1830~78</sup>の主導で内務省が設置され、交通網・通信網などの整備にも取り組んだ。

1880（明治13）年ころからは官営工場の払い下げもおこなわれ、民間企業の育成をうながした。こうした工業化の背景には、新貨条例<sup>3</sup>による貨幣制度の統一、

## 「歴史と私たち」

歴史総合の導入は、歴史が私たちと離れていることではなく、今の私たちと歴史が繋がっているということから学びます。

### ③オリンピック種目となった日本の柔道

皆さんは、「馬があう」「あげ足を取る」「痛みわけ」という言葉を知っているだろうか。これらは武道に由来する武道言葉といわれる。日本では、武家政権が700年近くつづき、武道文化ができた。国際連盟事務次長をつとめた新渡戸稻



▲国際色豊かな講道館の柔道夏期講習会

造は、英語で『武士道』を著して日本の武士道を世界に広めた。

地租改正による税制の整備、<sup>しぶさわえいいち</sup>渋沢栄一が設立した第一国立銀行などでの銀行制度の導入など、金融・財政面での近代化があった。

製糸・紡績・織物などの軽工業分野からはじまった工場制機械化は、しだいに鉄鋼や造船などの重工業へと広がり、日本でも産業革命が進展した。

### アジアと世界への影響

産業革命によって日本経済は飛躍的な成長を

とげ、1885（明治18）年から14年間で、輸出は5.8倍、輸入は7.5倍に増加している。1894（明治27）年からは<sup>きんこう</sup>均衡が崩れ、輸入超過の状態がしばらくつづいた。

また、軽工業分野での機械化が進み、加工品の大量生産が可能になったが、一方で原料の確保が課題となった。綿工業分野で

は、原料の綿花をインドから輸入するため、1893（明治26）年に神戸・ボンベイ間の国際定期遠洋航路が日印共同で開通した。その航路の途中で、日用雑貨品を東南アジアへ、紡績した綿糸を中国や朝鮮に輸出した。経済の結びつきが強まるにつれて、人と物の移動もさかんになり、<sup>アジアとの関係は密接になった。</sup>

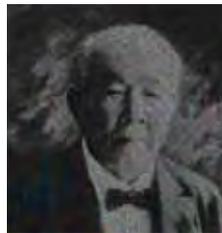
欧米との関係も同様で、経済交流はさらに強まり、1896（明治29）年には横浜・アントワープ間のヨーロッパ航路、神戸・シアトル間の北米航路、横浜・メルボルン間のオーストラリア航路の定期航路があいついで開通した。また、浮世絵や陶磁器などの美術がフェノロサらに高く評価され、海外へも紹介された。



▲土佐丸（五姓田義松画）1896（明治29）年、欧州航路の第1船として横浜港を出港した。

### コラム

#### 日本経済の父・渋沢栄一



1840年、現在の埼玉県深谷市の豪農の家に生まれた。一橋慶喜に仕え、パリ万国博覧会に赴く徳川昭武に随行して、1867（慶応3）年、フランスなど欧州を訪問。そのすさまじい国力に圧倒された。上下水道・蒸気機関車・発電機などを生み出した国力の秘密とは何か。その費用はどのように集めたのか。それを教えてくれたのが、銀行と株式会社の存在だった。

個人から資金を集めて事業に貸し出す銀行。個人に会社の株を買ってもらい、それを元手に事業をおこし、利益を配当して株主に還元する商社。政府に頼るのではなく、民間人がこれをおこなう。銀行と商社を組み合わせたような株式会社で、これを「<sup>かっほんほう</sup>合本法」と名づけ、日本への導入を決意した。

1873（明治6）年、日本初の銀行「第一国立銀行」を設立。さらに、利益の独占を嫌い、民間企業を育成し、王子製紙・大阪紡績・東京瓦斯など約500社を設立した。また、東京養育院の院長をつとめたり、「救護法」の実施など福祉事業に貢献し、1931（昭和6）年に死去。「日本経済の父」といわれた。

■金本位制の確立と幣制混乱の整理をめざし、一円金貨を本位貨とする円・銭・厘の十進法を採用し、新硬貨を発行した。



▲大久保利通（1830～78）薩摩藩出身。倒幕・維新に尽力し、西郷隆盛・木戸孝允と並んで「維新の三傑」と称された。明治新政府では内務卿として殖産興業に奔走し、藩閥政府の重鎮として権勢をふるった。

### コラム

学習するにあたって、生徒の興味・関心のわくテーマを選んで、小コラムを掲載しています

### 参照ページ

前後の関連した学習には参照ページを用いて、歴史のつながりがわかるようになっています

### 第2の問い

該当時間で学習したことを、自らの力で主体的に考えるために、「第2の問い」を設けました



わが国が西欧諸国の植民地とならなかったことが、国際社会にどのような影響を与えたのか考えてみよう。

## 歴史の扉

### 歴史は資料にもとづいて記述されている

歴史は資料にもとづいて記述されている。文献・遺物・絵画・写真・統計・新聞といった資料は、過去を知る手がかりとなる。これらのなかから複数を組み合わせて多面的に見ること、さまざまな方向から考えることが大切である。たとえば、明治時代の日記を資料としてつかうときは、その日記が「政治家の視点」で書かれているものなのか、「庶民の視点」で書かれているものなのかを見定める必要があるだろう。また新聞から、当時の事情で「書けなかったこと」を、前後の文脈や他の資料をつかうことで読み取ることも大切なことである。

一方、歴史を現在の価値観によって考えることは、避けなければならない。その時代にはその時代の価値観があり、今の基準で善悪をつけることによって、歴史の事実が見えなくなるおそれがあるからである。

## 「歴史と資料」

歴史総合を学ぶ導入として、資料が歴史を組み立てていること。また、資料を批判的・客観的にとらえることの大切さを学びます。

# 豊富で充実したコラム「歴史 View」

## ほかの「歴史 View」

「江戸 100 万の人口を支えた上下水道」  
 「浮世絵とジャポニズム」  
 「世界が驚いた伊能忠敬の日本地図」  
 「世界に影響を与えた日露戦争の勝利」  
 「日本美術を救ったフェノロサと岡倉天心」  
 「日本の「人種差別撤廃」提案」  
 「沖縄の祖国復帰」  
 「日本の国際協力とODA」  
 など 32 テーマ

## 「発展学習」

### ほかの「発展学習」

「幕末の密航留学」  
 「したたかな外交交渉の現場」

## 歴史 View

### 日本と国際社会の架け橋となった新渡戸稲造

武士道を通して日本人の道徳を説き実践した国際人

明治時代、わが国の多くの青年が欧米諸国に留学した。1884（明治17）年、22歳で米国に渡った新渡戸稲造（1862～1933）もその一人であった。

あるとき、ベルギーの法学者ド＝ラヴレーから、道徳教育の源泉として宗教教育が日本に存在するか、との質問をうけた。このことがきっかけとなって、新渡戸は、日本人の道徳観念の根源について思索するようになる。また、米国人の妻メリーからも、日本人には自明であるものの考え方や行動様式について、たびたび質問をうけていた。

こうした体験をもとに、新渡戸は1900（明治33）年、『武士道』を英文で著し、米国において出版した。新渡戸によれば、武士道とは、わが国の長い歴史のなかで神道を基盤とし、仏教や儒教を受容しつつ形成された道徳であり、倫理の源泉であったとして、その将来について次の言葉を残している。

「武士道は一つの独立した道徳の掟としては消滅するかもしれない。しかしその力はこの地球上から消え去ることはない。その武勇と文徳の教訓は解体されるかもしれない。しかしその光と栄誉はその廃墟を超えて蘇生するにちがいない」

聖書やギリシャ・ローマの古典などが豊富に引用され著された『武士道』は、わが国が日清・日露の2つの戦争に勝利をおさめた精神力の源泉であるとして、世界中から注目され、17カ国語に翻訳されるなどベストセラーとなった。

若いころ「願わくば われ太平洋の橋とならん」との志を抱いていた新渡戸は、東京大学に進み、アメリカ、ドイツの大学

京女子大初代学長を歴任した。

1920（大正9）年から7年間、国際連盟事務次長として第一次世界大戦後の国際協調に活躍。在任中、ノーベル賞受賞者などを委員として、教育、文化の交流、著作権問題などを審議する知的協力委員会を発足させた。これは現在のユネスコに引き継がれている。

晩年の1932（昭和7）年には、満州事変勃発後の日米関係の悪化を修復するため、日本の立場や政策への理解を求めて全米を100回以上講演行脚するなど、日米関係の修復に尽力した。

新渡戸は、自身が『武士道』で著した「義」「仁」「礼」「名誉」「忠義」などの徳目を実践した日本人として、その名を国際社会に残した。



▲新渡戸稲造



▲日本で出版された英文の『武士道』の表紙と中扉

## 発展学習 3

### 世界と日本

#### 捕鯨と日本人 — 海洋国家日本の食文化を探る —

「鯨油」から「石油」へ

現代の国際問題の一つに捕鯨問題がある。近年、わが国などの捕鯨国に対する反捕鯨勢力の圧力はますます強まっている。反捕鯨勢力は、食や自然に対する文化のちがいを認めない。

ところが、今日の反捕鯨国の多くは、19世紀半ばまではさかんに鯨を捕っていた。その目的は「鯨油」を得るためであり、海上で皮脂をボイルして油だけを採り、鯨肉や内臓、骨などは残らず海中に投棄した。しかし、石油が採掘されると、捕鯨には見向きもしなくなった。



▲鯨油を目的としたアメリカ式捕鯨による乱獲

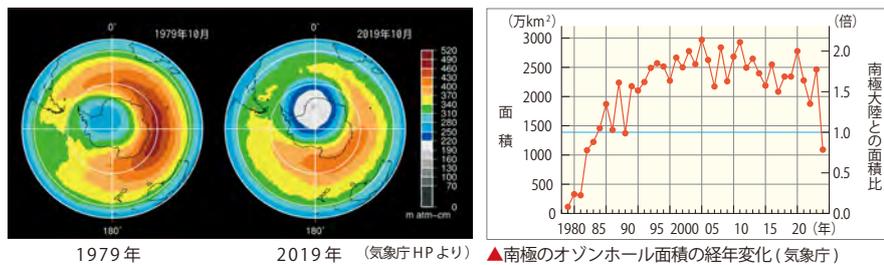
ところが、今日の反捕鯨国の多くは、19世紀半ばまではさかんに鯨を捕っていた。その目的は「鯨油」を得るためであり、海上で皮脂をボイルして油だけを採り、鯨肉や内臓、骨などは残らず海中に投棄した。しかし、石油が採掘されると、捕鯨には見向きもしなくなった。

# 「問い」の学習

## ⑤ オゾン層の破壊と回復

オゾンホールが注目されたのは1985年のことである。わずか8年でオゾン層が40%以上減少した事実は衝撃をもって受け止められた。地球を取り巻くオゾン層は、地上20～30kmの成層圏にあるうすい層で、生物に重大な影響を与える紫外線の大部分を吸収している。すぐに国際的な問題となり、「オゾン層の保護のためのウィーン条約」（1985年）、「オゾン層を破壊する物質に関するモントリオール議定書」（1987年）が採択された。

### ① オゾン層の破壊による環境悪化



### ② オゾン層を破壊する物質に関するモントリオール議定書



① オゾンホールは、円中心のグレーの部分で、オゾン層が大きく減少した1980年代はじめから、南半球の冬季から春季にあたる8～9月ごろ発生、急速に発達し、11～12月ごろに消滅するという季節変化をしている。

② モントリオール議定書にもとづく特定フロンの生産量・消費量の削減義務を履行するため、特定フロンの製造および輸入の規制措置をおこなう。オゾン層破壊効果がない代替フロンへの切替えを進めていたが、温室効果が高いことが

学習指導要領では、各編の冒頭に「近代化への問い」「国際秩序の変化や大衆化への問い」「グローバル化への問い」を設け、「考察するための問いを表現する」学習が求められています。そこで本教科書では、生徒が自ら問いを表現し、歴史とのかかわりの中で探究できるように、『「問い」の学習—あなたのテーマを探し出そう』として取り組み方を提示し、具体的な資料群を盛り込みました。

# 現代的諸課題の学習

「近代化と現代的な諸課題」を追究するにあたって〈学習の展開例〉

## （開発 ↔ 保全）を観点に）明治期における森林の活用と植林

現在、日本で森林が世界に比べて豊かに保たれているのは、なぜか。

「文明の前には森があった、文明のあとには砂漠が残った」（シャトーブリアン）。かつて世界は豊かな森におおわれていたが、文明の発達によって森林の活用が進み、砂漠化が拡大した。しかし、今なお日本は多くの森林におおわれている（日本69%、米国43%、カナダ38%、ドイツ33%、英国13%）。どうして日本では豊かな森林を維持できたのだろうか。

### 明治の文明開化と森林活用（開発）



明治新政府は、各藩が管理していた森林や寺社の森林を没収し、官林(国有林)とした。また、急速な近代産業の発展による薪炭や建築材の需要、養蚕業などで木材需要が増大した。とくに鉄道の普及によって多くの枕木が必要となり、日本の良質の木材は、アメリカなどに大

量に輸出された。そして、国有林や私有林の乱伐がおこなわれ、森林が劣化・荒廃し、無立木地化や疎林化が進んだ。明治中期の日本は、森林

「歴史総合」では、近現代史において「現代的諸課題の形成」に関わる歴史の理解が求められます。そこで、「近代化」「国際秩序の変化や大衆化」の各編では、5つの観点を手がかりに事例を提示し、「グローバル化」の「現代的諸課題の形成と展望」では、生徒自らが主題を設定し、多面的・多角的に考察・構想・表現し、探究できるように、構成いたしました。

**著作者**

伊藤 隆 (東京大学名誉教授)  
 渡辺 利夫 (拓殖大学元総長)  
 小堀桂一郎 (東京大学名誉教授)  
 田中 英道 (東北大学名誉教授)  
 松井 嘉和 (大阪国際大学名誉教授)  
 有馬 哲夫 (早稲田大学教授)  
 山下 英次 (大阪市立大学名誉教授)  
 占部 賢志 (中村学園大学教授)  
 坂口 秀俊 (元福岡県立門司高等学校校長)  
 山口 英明 (福岡県立ありあけ新世高等学校校長)  
 松浦 明博 (帝京科学大学特命教授)  
 田中 秀典 (清和大学准教授)

**編修協力者**

長濱 博久 (元福岡県立ありあけ新世高等学校副校長)  
 飯島 利一 (國學院高等学校教諭)  
 水谷 真逸 (近江高等学校教諭)  
 所 雄太 (八王子実践高等学校教諭)  
 小森 誠 (福岡工業大学附属城東高等学校教諭)

## 「教師用指導書」(現在：編集中)

教師用指導書は、二つの構成になっています。「授業編」では、1時間の授業の進め方が一目でわかるようになっています。また、「研究・解説編」では事項の詳しい説明をしています。ともに、授業に役立つ情報が満載されています。

## 「授業編」(サンプルページ)

**1節 18世紀の日本とアジアの経済と社会**

18世紀の日本では、幕藩体制が安定すると共に、農業生産が拡大し、諸産業が発展した。生産された年貢米や特産物を流通させる交通網が発達し、商業や金融が活発になり、現在につながる経済活動の原型が生れたことを確かめた。

**学習のポイント**

18世紀の日本では、幕藩体制が安定すると共に、農業生産が拡大し、諸産業が発展した。生産された年貢米や特産物を流通させる交通網が発達し、商業や金融が活発になり、現在につながる経済活動の原型が生れたことを確かめた。

**第1の問いと展開例**

「18世紀の日本では、どのように手工業製品が生産されたか、取り出されていたのだろうか。」

**グラフ「耕地面積の拡大」から**

「日本の歴史の中で、耕地面積が一番拡大したのはいつの時代だろう。」

江戸時代初期から中期、すなわち18世紀にかけての約150年間で耕地面積が約2倍になっており、日本の歴史で最も拡大が著しかった時代である。近代以降、20世紀前半には500万町歩(北海道を入れて約600万町歩)を超えるようになるが、土木機械などがなかったころに、これを元にして、「生産の拡大は農民の生活にどのような変化をもたらしたのだろうか。」「農業やそれ以外の産業にはどのような変化が起きたのだろうか。」と投げかけて、関心を深めることができるようにしたい。

**農業生産の拡大**

**表「おもな名産品」から**

「それぞれの名産品は、現在の都道府県で生産されているだろうか。知っているものをあげてみよう。」

「自分の住んでいる地域で名産品となっているものは、どのようなものがあるのだろうか。」

※経済産業省ホームページ(「伝統的工芸品」)

**挿入「工場制手工業のようす」から**

「今の工場と似ているところと違うところをあげてみよう。」

「原料となる棉花はどのようにして手に入れたのだろうか。完成した機織品はどのようにして販売されたのだろうか。」

**◆指導上の留意点**

農業生産拡大の要因として、地曳網で大量捕獲された鰯から生産された干鰯が使用されるようになったことなど、各産業の発達と相互に関係し合っていたことに気づかせたい。また、国内の耕地面積も江戸時代の開発がほとんど進んだことや、各産品の生産も多くなったことが時代の始まったことを通して、江戸時代の経済成長が近代化の基礎となったことに気づかせたい。

**1節 18世紀の日本とアジアの経済と社会**

18世紀のアジアは、清(中国)やインドの手工業生産技術の進展により、さまざまな物資が生産されるようになった。アジア地域内で流通する機会が広がり、日本の物産も広く取引された。品物の多くはアジアの諸国をめぐり、ヨーロッパはアジアの諸国に輸出された。

**18世紀の日本における生産と流通**

行き交う人々と物産

18世紀の日本では、どのような手工業製品が生産されたか、取り出されていたのだろうか。

**農業生産の拡大**

日本では17世紀中ごろ、治水工事や輸送路が開通し、農業技術も進歩して、さまざまな物資が生産されるようになった。耕地面積はおよそ2倍に拡大した。また、農具や肥料の発達によって農業技術も進歩し、稲作は飛躍的に増大した。農家の収入も増え、農民の生活水準も向上した。江戸時代初期に約1200万人だった人口も、江戸時代には3200万人にまで増加した。

江戸幕府は、商品作物の生産を制限したが、のちに緩和され、全国各地で棉花や桑、たばこ・野菜などの商品作物が盛んに栽培されるようになった。出羽の紅花や向島の藍など地域性のある商品作物も栽培された。また、絹織物では京都の西陣織、縮緬物の久留米織、麻織物では越後の越前縮緬、和紙では越後の春巻紙、陶磁器では尾張の瀬戸焼や肥後の有田焼、薩・伊予の酒造、野田・越前の子の醤油などが代表的な名産品となった。機織物を担いで商人たちは、農民に道具や材料を前貸しして、生産された商品を買取る問屋制家内工業や、さらに19世紀に入ると、工場に農民を集めて分業で働くマニュファクチュア(工場制手工業)も出現した。

林業や漁業・鉱山業・製塩業などの発達も進んできた。地曳網によって大量に捕獲された鰯が干鰯や粕として、金箔(金銭で買う肥料)に使用され、農業生産を拡大するなど、農業の発展は相互に関係しあっていた。また、海産物の機織物は、輸出にむけてさらに輸出された。

**交通の発達**

**挿入「江戸時代の交通網」から**

「東海道が通っていたころは、現在はどのような交通路となっているだろうか。」

「自分の住んでいる地域で、当時どのような交通が行われていたのだろうか。」

「陸上交通、河川交通、海上交通のそれぞれの交通路を現在と比較した場合、共通点と相違点を考えてみよう。」

「全国各地にある都市は、どのようにして発達してきたのだろうか。」

**◆指導上の留意点**

国内の交通網については、この時代に現代の基礎ができていたことに気づかせたい。とりわけ、機械的な動力のない時代に、大量輸送は海や河川などを経由した船舶が重要な役割を担っていたことをつかませたい。

**商業金融の発達**

**表「三都と世界の主要都市の人口」から**

「18世紀の日本と世界の主要都市の人口を比較して、どのようなことが言えるだろうか。」「都市の発達は、その地域や国の経済活動とどのような関係があるだろうか。」

**挿入「堂島の米市場」から**

「人びとは、何のために集まっていたのだろうか。」「江戸時代、米市場が重要な意味を持ったことと結びつけて説明してみよう。」

「江戸時代に生まれた流通の仕組みである問屋・仲買・小売は、現在ではどのようになっているのだろうか。」

**◆指導上の留意点**

都市はさまざまな経済活動の拠点であり、都市の発達と経済活動の発展の関係をつかませたい。その点から、18世紀の日本はヨーロッパと比較しても、かなりの水準で経済活動が進んでいたことに気づかせたい。また、江戸時代は年貢米換金であり、米は食料としてだけでなく、一種の通貨の役割も果たしていたが、それを換金することでさらに高度な貨幣経済が成長した。堂島の米市場では、世界でもいち早く先物取引が行われており、日本国内限定ではあったものの高度な経済システムが形成されていたことにもふれたい。その上で、流通機構も現在の基本的な仕組みはこの時代にできあがっていたことに気づかせたい。

**第2の問いと展開例**

「18世紀の日本では、農業・交通・商業が発展した。この要因を考えてみよう。」

「農業生産の拡大と商品作物生産の拡大の関係の説明してみよう。」「農業生産や名産品生産の拡大と諸産業の発展の関係を説明してみよう。」

などの発問を通して、それぞれの産業の関連性について考察を深められるようにする。

**板書例**

**【課題】** 18世紀の日本では、どのように手工業製品が生産されたか、取り出されていたのだろうか。

○農業生産の拡大  
耕地面積の拡大・農業技術の進歩…江戸時代中期→人口の増加(1200万人→3200万人)  
商品作物(棉花・桑・藍など)の栽培  
名産品の生産  
問屋制家内工業やマニュファクチュアの出現  
林業・漁業・鉱山業・製塩業などの発達

○交通の発達  
陸上交通…五街道(東海道・中山道など)  
河川交通…富士川・保津川・高瀬川などの開削  
海上交通…菱垣廻船・樽廻船(江戸〜大坂、西廻り海運・東廻り海運)

○商業金融の発達  
三都(江戸・大坂・京都)の繁栄  
商業の発達…札差・掛津川・高瀬川などの開削  
問屋・仲買・小売→一株中間の結成